

料とし、水巴は「曲水」(4-3) 消息欄に「長頸子君この月初めより伊予道後の温泉に遊びて未だ帰京せず。曲水9月号に温浴雑記を寄せられたり。観察筆致相俟て面白し」と7月24日に書いている。

弟欣也入試合格。

8月22日付青木幸太郎宛、静岡から写真ハガキ。来岡の苔雨と同市旅館中藤屋での寄せ書きである。

9月・「曲水」(4-4) に随筆「浴泉雑記」。

この月、花酔を郷里にいざない、静岡の俳人余石、它可子らと日本平、龍華寺、久能、三保に遊んだことが、日付不明の青木幸太郎宛写真ハガキ及び「曲水」(4-5)、水巴短信の文面より推察される。

10月・前月よりこの月にかけて郷里で過ごしたと思われる。10月20日付で水巴は「長頸子君未だ上京せず、不都合に候」(「曲水」(4-6))と記しており、又同号句帖の3句は静岡長頸子となっている。(8月、9月、10月の間、例年になく帰郷度々、青春の日々をすごしているのは、欣也の進路確定による安緒、解放感もあったのであろうか)

11月6日・水巴宛書信のかたちで「曲水十一月号を読みて」を執筆。たまたま文中に前田普羅の批評に反論した箇所があり、普羅との間に俳句美をめぐる論争となる。

「曲水」(4-6)、句帖3句、曲水句評を載せる。

12月・「曲水」(4-7)。近詠2句及び「曲水十一月号を読みて」を載せる。(これに対する普羅の再反論「長頸子君の評を読みて」が同誌(5-1)にある。)

▽大正9年(1920)

3月・「曲水」(5-4) 消息欄に「長頸子君は上京後矢張り海国少年社に在勤」とあり。(したがってこの年の1月は帰郷していたと思われる。)

6月・「海国少年」今月号より復刊。(同誌(5-6) 大正10年6月号編集後記による)

(近代文学館蔵の現存資料から言えることは、雑誌「海国少年」は大正5年1月に発刊され、すくなくとも大正8年5月号までは発行し、そのあといつからかは不明だが、一時休刊となり、大正9年6月号から復刊したことになる。なお、国会図書館蔵の、東光館発行「海国少年」明治30年〜31年は発行年から言って厚一との関係はきわめて薄い。)

「曲水」(5-7) 消息欄に「長頸子君今度海国少年社の社主となりました。大いにおさまってゐます」とあり。

(弟欣也談によると、大正9年夏欣也が上京すると、田端の家は2階2間を通して借りてあった。

この頃「海国少年」の経営を引受け、父伊三郎を社主とし、厚一は編集他いっさいを受持った。当時海野家の財産管理をしていた天野廉から、伊三郎は欣也学資としてとってあった1万円を引き出した。)

### 「海国少年」誌

8月7日付、青木幸太郎宛ハガキは、表書差出人の所は印刷

